

吉永家・寢室

カーテンは閉められ、電気はつけておらず、テレビの光だけが部屋を照らしている。

部屋は散らかっており、食べたもののゴ

吉永隆介（21）、ベツドの上で寝転び、テレビでは、逆側の壁の方を向いてゐる。

隆介、目を瞑っていると、窓の外から子

隆介、目を開け、耳を傾ける。  
「（楽しそうに）わー！」

子Aの声「あつ！ずるいよ！」

車が通り過ぎていく音がする。

子田の声「優太が鬼！」  
達の声「（楽しそうに）わー！」

隆介、嫌そうな顔をして、テレビの音量を開け、再び目を閉じる。

隆介、眠っている。

インターホンが鳴る音がする。隆介、目を覚ます。一瞬、玄関の方を見

すると、再びインターホンの音が鳴る。隆介、鬱陶しそうな顔で玄関を見て、布

再び、インターホンが鳴る。勢いよく布団から起き上がり、イ

「（鬱陶しそうに）はい？」

隆男隆  
介の介

「声「宅配便です」  
そこに置いておい  
てください」





